

フラランケンケンシエンタイン博士、奮闘す
※百四十字を上限にしたバラグニアを九編作成し、ひとつの章編として構成しています。

「だが、博士ならざる身に奇跡を起こす力はなかった。(了)」
「生きてる、生きてる！」
「太陽は雲に隠れ、稲光が空を劈く。
博士の台詞はこんなふうだったと思う。ぼくの脇に助手が現れ、手術台に死体が載せられた。この冒瀌に耐え切れず、太陽は雲に隠れ、稲光が空を劈く。
ぼくは天へ腕を掲げる。
暗黒の雲が太陽を覆っていないならなかった。

ぐる回る。
新しい死体を漁るせむしの助手よろしく、墓の周りをぐるぐる回す。
雲ひとつない。しかし、これでは駄目なんだ。ぼくは真

空を仰いだ。
本堂に戻って行く母の背中を見送り、ぼくは一人になった。喪服の隠しから煙草の箱を取り出す。煙を吸い込んで

は済み、もうすべきことは何もない。
考えてもいなかった言葉が口から滑り出していた。葬儀

「もうちょつとだけ」
母に声をかけられる。
「お腹、空いたでしょ？ 精進落とし食べに行こう」

ける。家族の中で煙草を喫うのは、ぼくだけだ。
墓前へ煙草を供えるために封を切り、一本啜えて火を点

世紀前に建てられた家屋は、存外に広かった。
ぼくは、祖父の布団から染みの浮いた天井を眺める。半

姿に怖気を振っていたのである。
障子越しに声をかけると祖父は眠たげに迎えてくれた。
屋間、講釈を垂れていたにも拘らず、ぼくは寢床で震えていた。映画のセットや滑稽とさえ考えていたせむし男の

だ。
一本の煙草を大事そうに喫む祖父の姿が今も目に浮かん

「ウイルスは自然のものだろう。だから神様だよ」
ぼくは首を傾げた。
「神様？ ウイルスでなるんだよ」
「神様の作った化け物は怖いね。人間は到底、及ばない」
祖父にテレビで見た映画の話をする。
「平気だよ。ぼく『ゾンビ』だつて見るんだもの」

銀幕の思い出

フラランケンケンシエンタイン博士、奮闘すの巻



題 名	銀幕の思い出
作 者	フラランケンケンシエンタイン博士、奮闘す
発行日	2014年4月29日
連絡先	twitter : @donut_no_ana
	tumblr : http://donut-st.tumblr.com/

使用画像：ヒューマンピクトグラム2.0
<http://pictogram2.com/>

出い思の幕銀

リアルが巡り、白い幕に影が映し出される。忙しなく瞬
く影は、やがて収束し、ひとつの像を結んだ。
モノクロームの画面はフイルムの傷が目立ち、俳優の動
きも滑らかではない。字幕は七五調だ。

映写技師さえ居眠りし、客の抗議の音がぼくを目覚めさ
せる。思えば、不真面目極る映画鑑賞であった。

両親は共働きて忙しく、ぼくはよく祖父父母の家に預けら
れていた。

祖父は一風変わった人物だった。煙草の銘柄、衣服の型
や色、起床就寝の時間まで決まっている。その伝で土曜は
映画館へ出かけたものだ。誘われたぼくは、喜び勇んで後

出い思の幕銀

へ従う。
屋を過ぎた住宅街を二人で並び、駅のほうへ歩いた。

「先生。今日は『フラランケンケンシエンタイン』でございますよ。
坊ちゃんには少々、恐ろしい話かもしれませんが」

隣近所の人々から祖父は『先生』と呼ばれていた。それ
は彼が郷土史家であり、高校の教師を長年、勤めていたた
めである。

「……そうですか」
小屋の主人の言葉に祖父は迷っているふうであった。

映画の帰りは蕎麦屋に入る。そう決まっていた。